

玖珂町埋蔵文化財調査報告 第2集

瀬田城跡

1994

玖珂町教育委員会

玖珂町埋蔵文化財調査報告 第2集

せ だ
瀬 田 城 跡

1994

玖珂町教育委員会

序

本町瀬田上の城山は山機工業株式会社の所有地ではありますが、玖珂町教育委員会はその整地開発に先立ち、同社及び山口県教育委員会と協議を重ね、文化財保護のため発掘調査を実施いたしました。

その結果、遺構として弥生時代の竪穴住居跡、段状遺構、土壙、木棺墓墓壙（2基）、中世掘立柱建物の柱穴を検出しました。遺物は弥生土器片、中世の土師器片、瓦質土器片、鉄釘、銅銭等を出土しました。

本書はこれら発掘調査の記録であり、古代から中世玖珂の歴史を知る上で貴重な資料となることと思います。

これによって、今後更に文化財に対する認識や理解が深まり、教育や学術研究のために本書が有効に活用されますならば幸いです。

なお、この発掘調査、ならびに本書の作成は山口県教育委員会及び山口県埋蔵文化財センターにお願いしたものであり、ここに関係者各位のご尽力に対し深甚なる謝意を表します。

平成6年3月

玖珂町教育委員会 教育長 月永哲夫

例 言

- 1 本書は山機工業株式会社の資材置場建設に先立って、玖珂町教育委員会が平成5年度に実施した、玖珂郡玖珂町字城山（瀬田上）所在の瀬田城跡の発掘報告書である。
- 2 発掘調査の実施にあたっては、山口県埋蔵文化財センターに職員の派遣を依頼し、技術援助を得、玖珂町企画課並びに地元関係各位から協力・援助を受けた。
- 3 調査組織は次のとおりである。

調査主体 玖珂町教育委員会 (教育,長 月永 哲夫)
事務局 玖珂町教育委員会 (事務局長 細川 正裕)
(社会教育課 内田 陽久)
調査員 山口県埋蔵文化財センター (指導主事 石川 満)
(指導主事 豊島 正行)

〔援助〕 山口県埋蔵文化財センター職員

- 4 本書で使用した「遺跡の位置図と周辺の遺跡」(第1図)は玖珂町から提供をうけた地形図「玖珂町管内図」を使用したものである。
- 5 本書に使用した方位は国土座標で、レベルは標高で標示した。
- 6 本書で使用した遺構略号は次のとおりである。
S P…柱穴 S B…住居跡 S K…土壇 S T…木棺墓跡
- 7 本書で使用した遺物番号は、実測図中の遺物番号と対応する。
- 8 本書に収録した実測図・写真の作成及び本文の執筆は、中村の指導・援助を得て石川・豊島が分担して、村岡が編集した。

本文目次

- I 位置と環境 1
- II 調査の経緯 2
- III 調査の成果 4
 - 1 遺構 4
 - 2 遺物 6
 - 3 まとめ 8

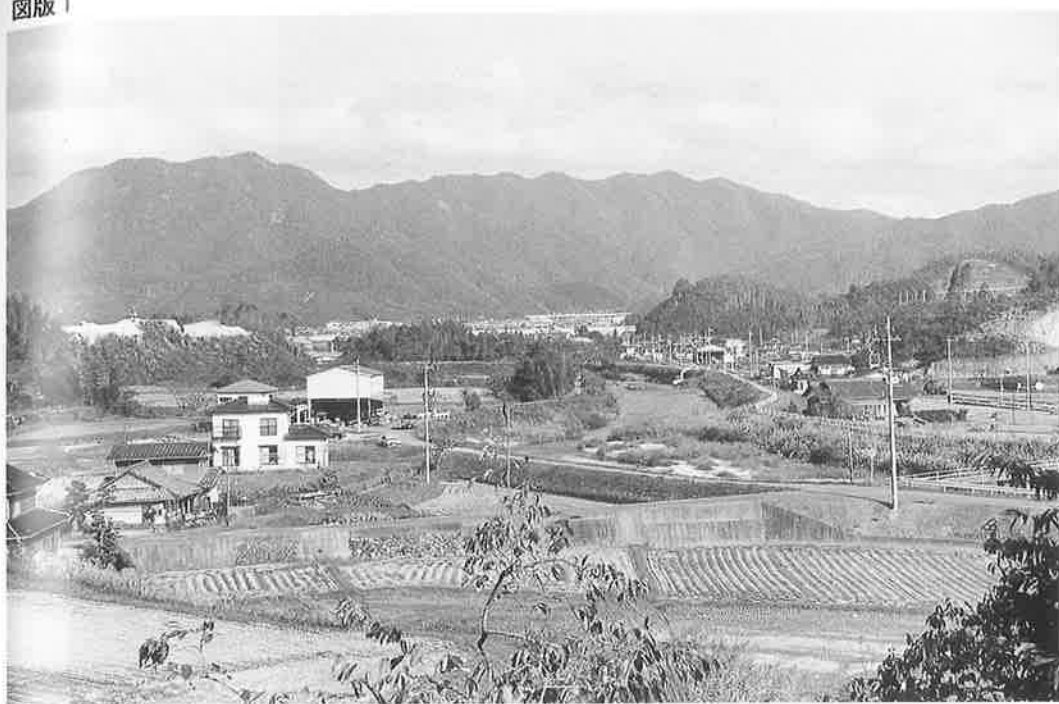
挿図目次

- 第1表 遺跡の位置図 1
- 第2表 調査範囲図 2
- 第3表 遺構配置図 3
- 第4表 検出遺構実測図(1) 4
- 第5表 検出遺構実測図(2) 5
- 第6表 出土遺物実測図(1) 6
- 第7表 出土遺物実測図(2) 7

図版目次

- 図版 1 調査区遠景・調査区全景
- 図版 2 検出遺構(1)
- 図版 3 検出遺構(2)
- 図版 4 出土遺物





調査区遠景



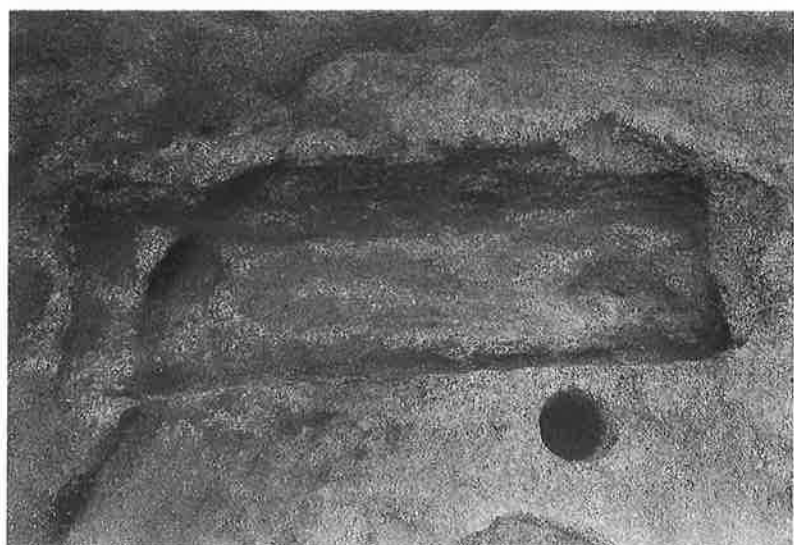
調査区全景 (完掘)



竪穴住居跡 (SB-1)



段状遺構



木棺墓跡 (ST-1)

集石

溝状遺

石組遺

集石遺構 (SK-1)

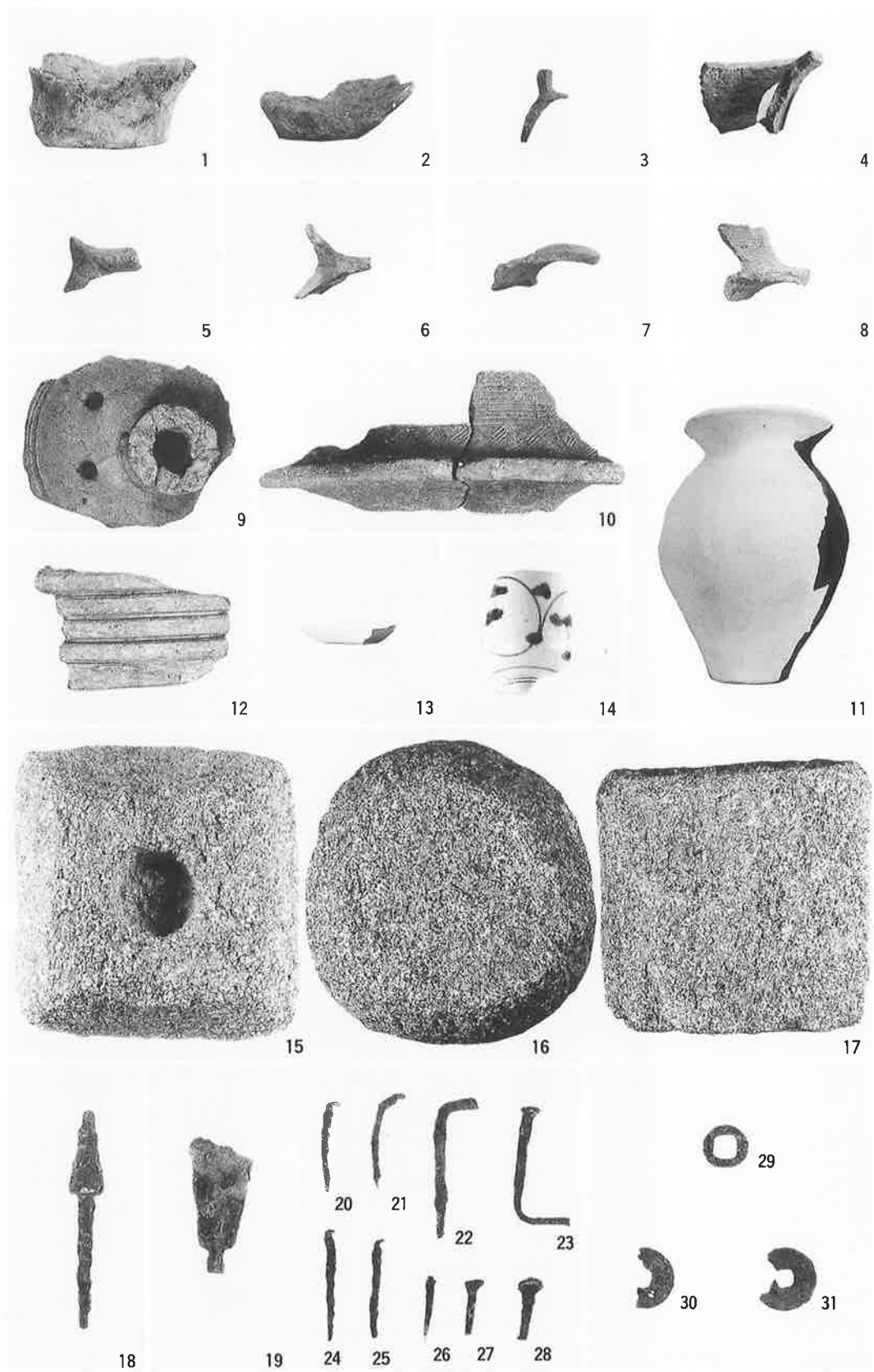


溝状遺構



石組遺構





出土遺物

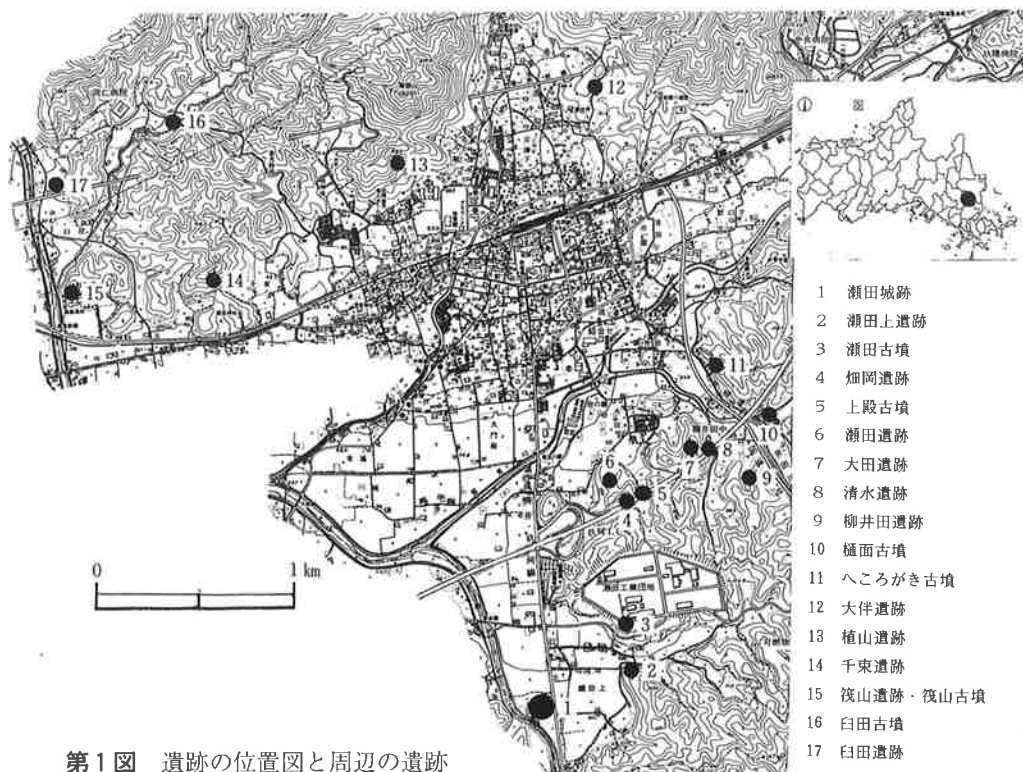
I 遺跡の位置と環境

瀬田城跡は、玖珂郡玖珂町大字瀬田上城山に所在する。

玖珂町は山口県東部にあり、東部に塔ヶ森、南部に高照寺山・氷室岳、西部に烏帽子岳、源九郎山、西北部に物見岳、北部に蓮華山・鞍掛山が高原状山地を広げ、丘陵性山地をなす堆積性の盆地である。本遺跡は町南部から西部にかけて流れる島田川流域中央部に西光寺から北東に張り出す標高約60mの丘陵上にある遺跡である。島田川はこの丘陵を横切っているが、以前はこの丘陵を回るように蛇行していたと考えられる。そして、この丘陵は黒雲母花崗岩で周辺平地より10m高いが、かなり風化が著しい。

島田川の上流域には縄文時代から古墳時代の多くの遺跡が分布している。玖珂盆地はかつて浅い湖沼であつたらしく多くの遺跡が分布する。盆地南西の扇状地にある用田遺跡からは縄文時代早期から晩期にかけての土器片等が出土した。弥生時代になると筏山遺跡をはじめ、山陽自動車道建設に先立って調査された畑岡遺跡、清水遺跡からも多くの遺物、遺構が発見された。また、古墳時代に入って、大和朝廷の支配下にあった周防国造はこの地に多くの古墳を造営したものと考えられる。中世になって、毛利氏の防長進出の頃、この地は大内方の鞍掛山城と毛利方の蓮華山城、瀬田城に分かれて対立し、1555年の鞍掛合戦で毛利氏が勝利し、その後台頭するに至った。

今回調査した山城は瀬田城（小方元康）を守る砦として築かれたものであろう。



第1図 遺跡の位置図と周辺の遺跡

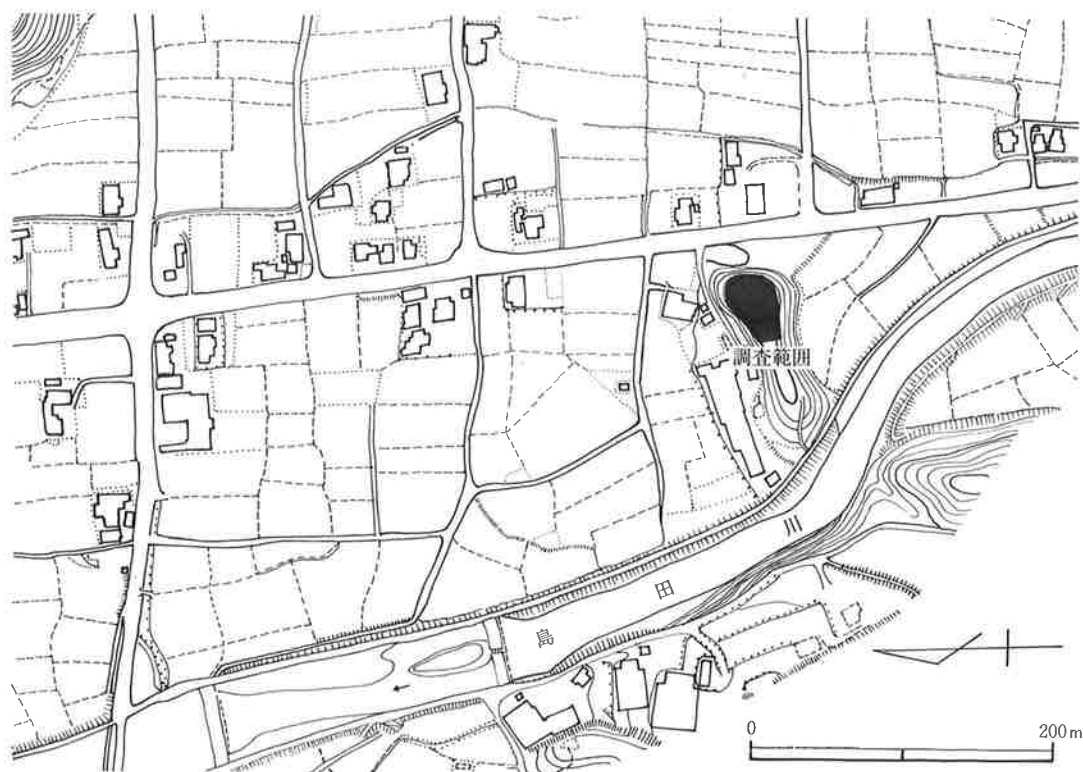
Ⅱ 調査の経緯

玖珂町は、山機工業株式会社から平成5年末から瀬田上城山を資材置き場として開発工事を開始したいとの申請を受けた。その際、玖珂町は山口県教育委員会に対し開発予定地内の分布調査を依頼し、県は同年6月17日に現地の分布調査を実施した。調査はあらかじめ樹木を伐採した後、トレンチ調査を行った。その結果、中世の柱穴をはじめ、中世の土壙、溝、弥生時代の段状遺構を検出した。また、いくつかの中世土器片と弥生土器片を出土した。

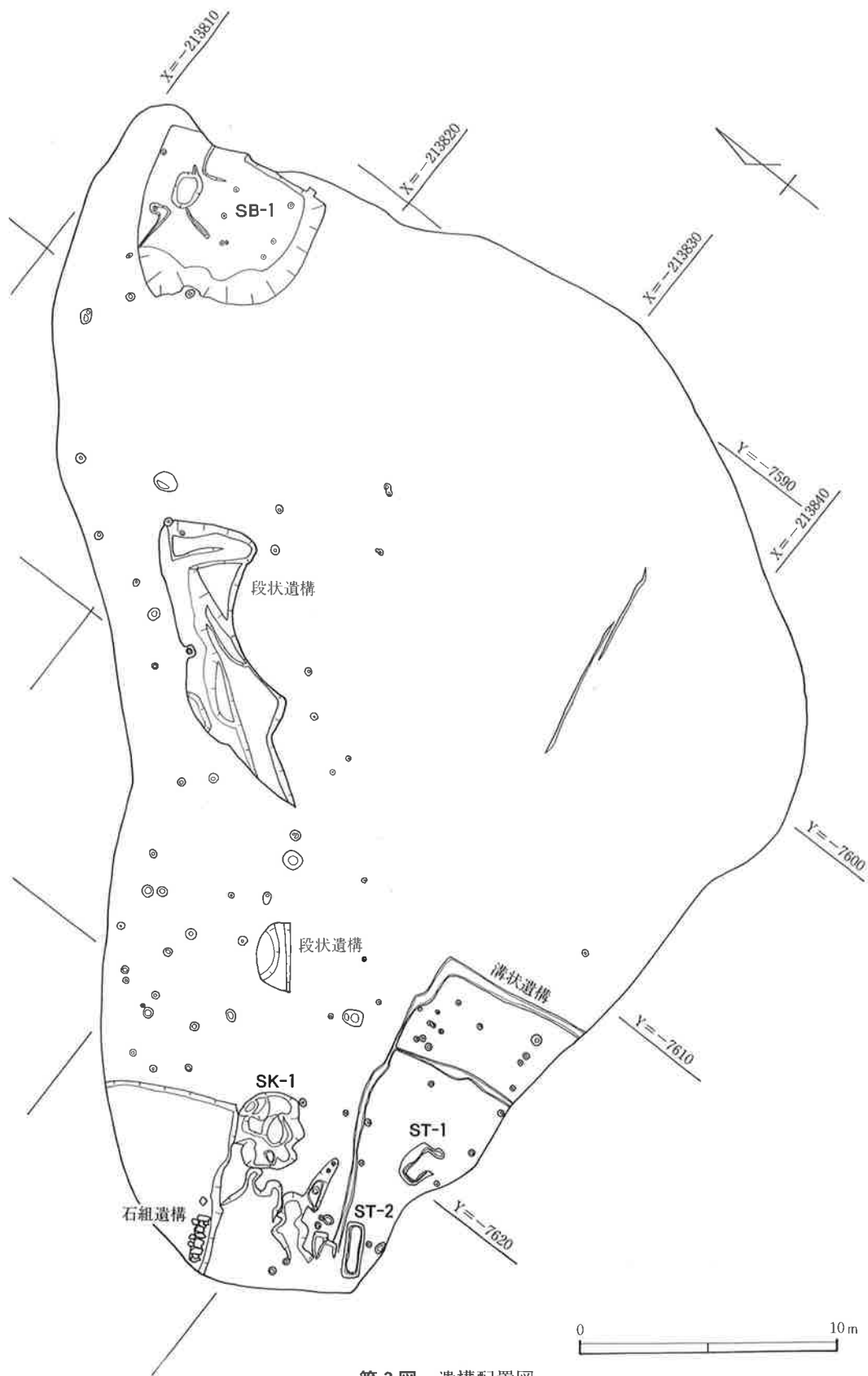
調査は、山口県埋蔵文化財センターが玖珂教育委員会の依頼を受けて11月1日から実施した。重機による表土除去の後、新たにトレンチ調査を行って埋土の厚さを確認した上で遺構検出をしていった。調査中、弥生時代の段状遺構を検出したが、遺構面が約2.5m以上にも及んだため、その全容は明らかにできなかった。

調査終了間際の11月25日に空中撮影を実施し、11月27日に約180人の見学者をえて現地説明会をおこなった。11月29日～12月1日に検出した遺構の実測、写真撮影等を行って現地での調査を終了した。

なお、調査面積は約1300㎡である。



第2図 調査範囲図



第3図 遺構配置図

Ⅲ 調査の成果

1. 遺 構 (図版2・3 第4・5図)

今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡1軒、箱式木棺墓2基、土壙1基、段状遺構1基、石組遺構1基、その他多数の柱穴がある。これらの遺構の内、SB-1は丘陵先端部に在るが、他は調査区中央部ないし西側に集中している。

SB-1 調査区北東端に位置する。平面形は円形であるが、東側の壁は崩落をしている。規模は、径が約7.2mで、深さは0.47mを測る。柱穴は6本で、径は平均で0.24m、深さは平均0.11mである。屋内土壙は2基あり、ひとつは長径1.48m、短径1.00m、深さは0.22mで、長さ1.40mの溝を伴う。他の土壙は長径0.44m、短径0.36m、深さ0.09mで中に深さ0.16mの柱穴があり、同じく1.68m、深さ0.08mの溝を伴う。

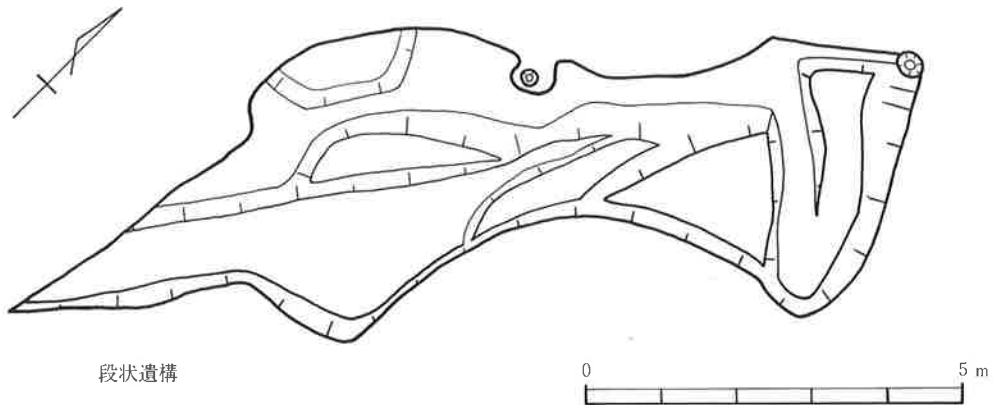
SK-1 調査区西側に位置する焼土壙である。長径2.82m、短径2.40m、深さは深い所で0.27mである。土壙中には角ばった山石を重ね敷いており、中央部の石は焼けている。また、土壙中より弥生土器片を出土した。

ST-1・2 ST-1は一部が削平されているが、長径1.64m、短径0.98m、深さ0.22mで床面底部に深さ2cmの棺を据える溝をもつ。ST-2は長径2.16m、短径0.72m、深さ0.31m、深さ3cmの溝をもつ。いずれも、地山を掘り抜いた箱式木棺墓と思われる。

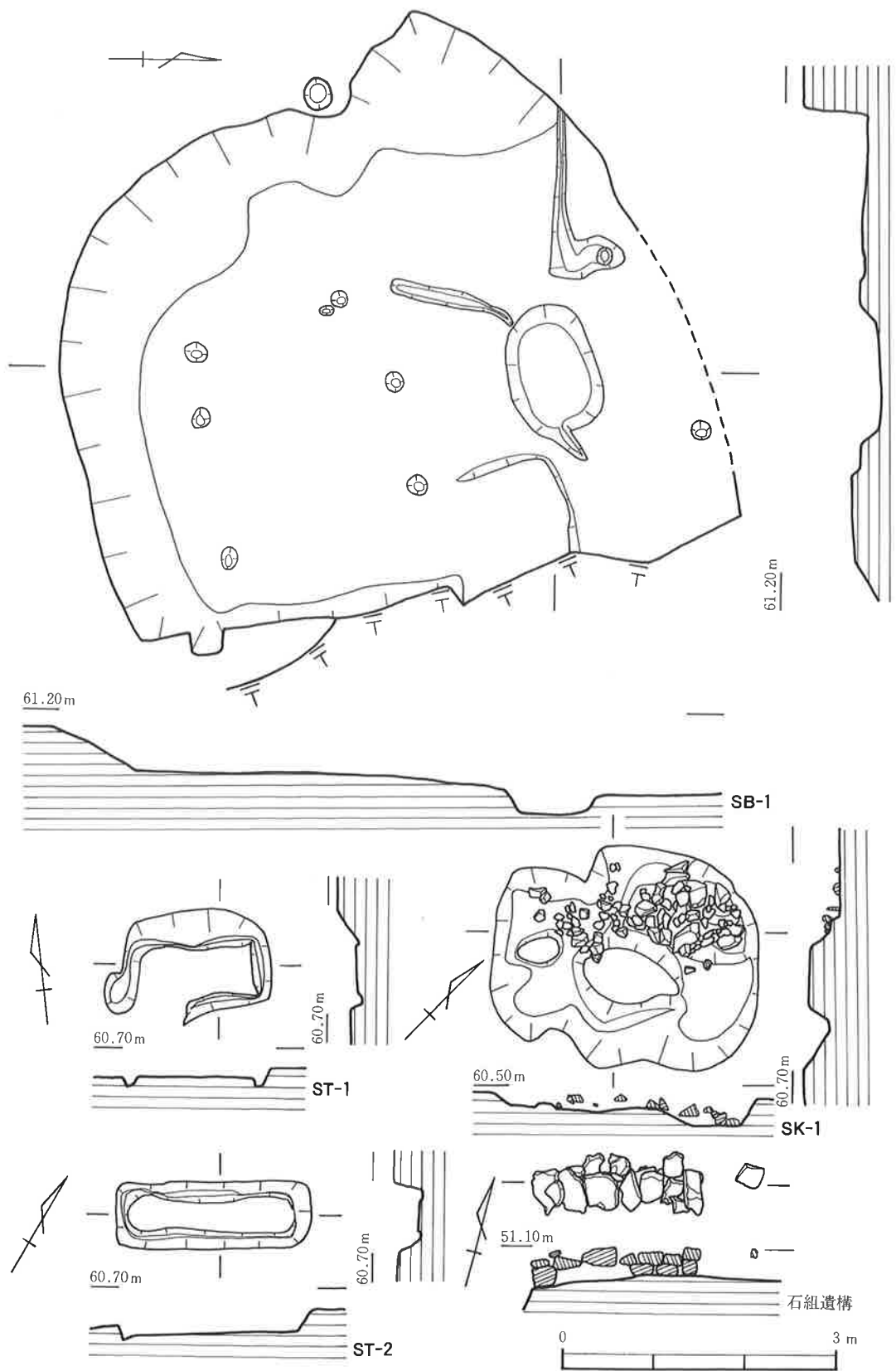
段状遺構 調査区北側斜面に造られた遺構で、長さが北東から南西に約18.8m、深さは検出した深さで約1.15mで、さらに段は北側へ向かって続くものと見られる。検出した最下段からは多量の弥生時代中期から後期にかけての土器を出土した。

中世柱穴 掘立柱建物とみられる柱穴を検出したが、明確に建物は復元できなかった。建物が建っていたと思われる柱穴の径は30~40cmで、深さは20~55cmである。おそらく、出土した遺物から室町時代から戦国時代にかけての建物が二~三軒建っていたと考えられる。

石組遺構 調査区西端に東西方向に長さ1.84m、幅0.56m、高さ0.24mの石組で、下段の石には三つの五輪石(火輪、水輪、地輪)を使っている。遺構の性格は不明である。



第4図 検出遺構実測図(1)



第5図 検出遺構実測図(2)

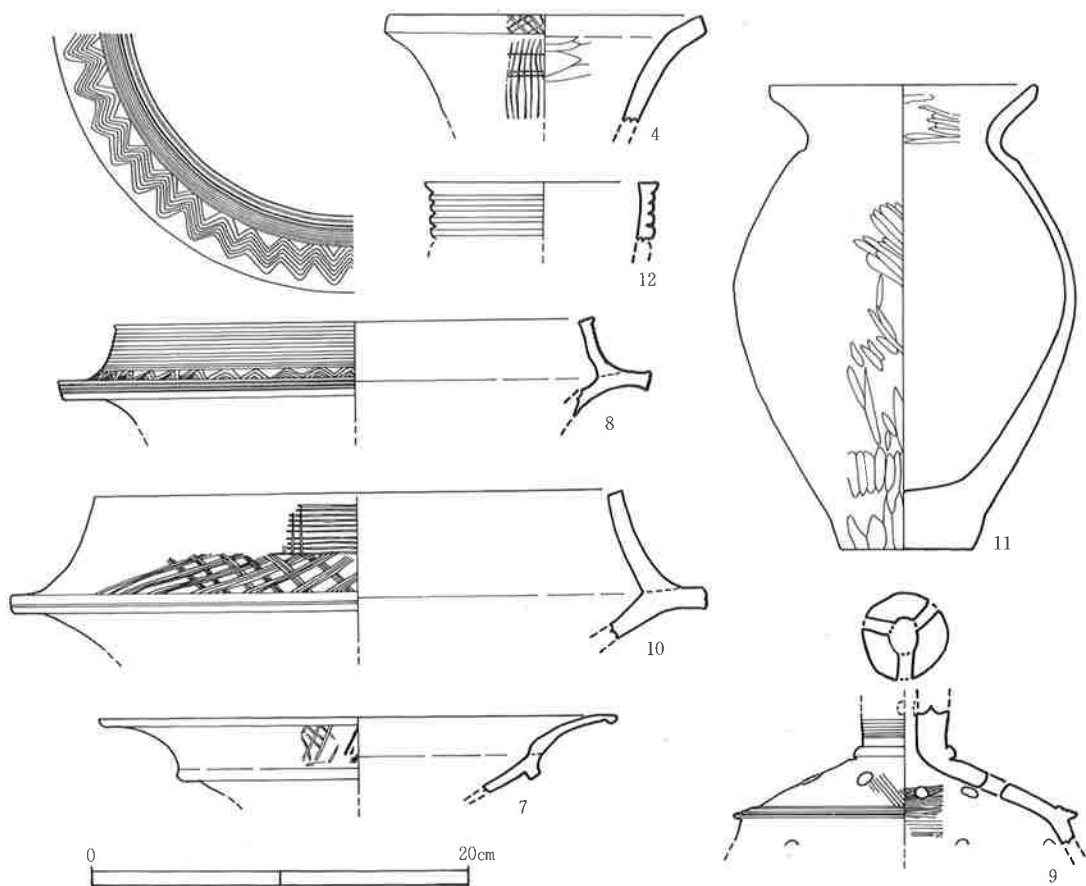
2 遺物 (図版4 第6・7図)

調査区は中世において丘陵上部を削平し、それによって出た土を北側斜面客土している。その上に遺構を築いているが、さらに後世の開発によって削平を受けているため、遺物の残りが悪い。特に、中世の土器については、土師器片、瓦質土器片、陶器片で完形がなく、固体数も少ない。

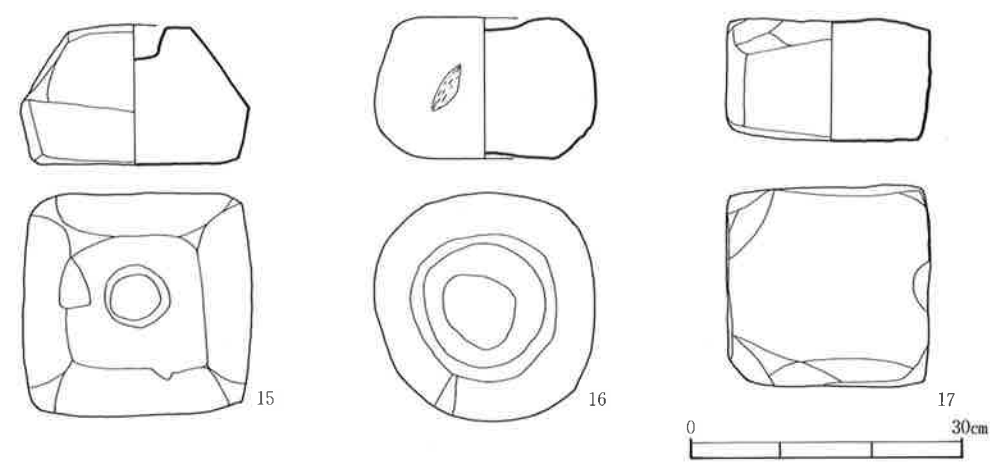
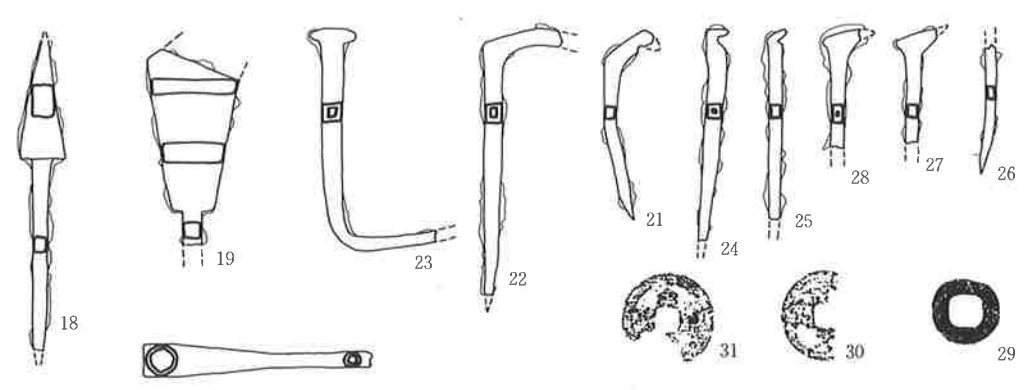
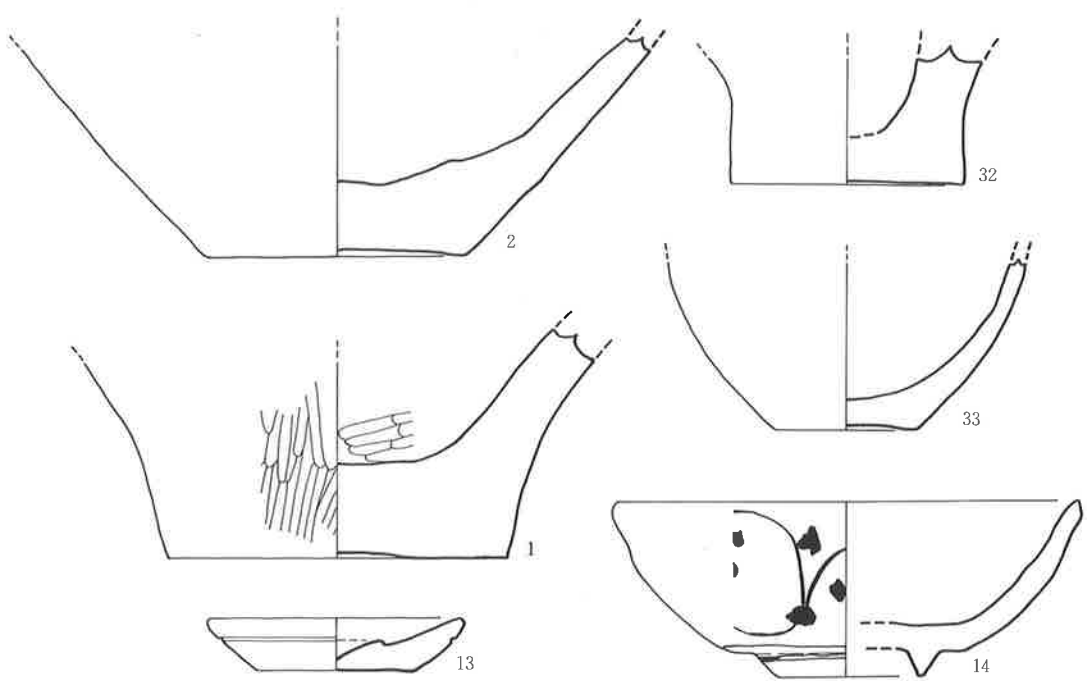
土器 1は弥生中期の甕の底部。2は弥生後期の壺の底部。3は弥生後期の壺の口縁部。4は弥生中期の壺の口縁部。5は弥生後期の大型壺の口縁部。6は弥生後期の壺の口縁部。7は弥生後期の高杯片。8は弥生後期の壺の口縁部。9は器台の脚部ですかしの穴が開いている。10は弥生後期の壺の口縁部。11は弥生中期の無紋の壺。12は弥生後期の高杯片で焼きがよく異質な土器である。13は13Cから14Cの土師皿。14は近世の碗である。

金属器 18・19は中世山城に伴う鉄鏃であるが、18は類例がない。20~28は中世柱穴から出土した鉄釘であり、掘立柱建物に使用されたものであろう。29~31は銅銭で、29は16C中期に出回った私鑄銭であり、無文字の粗悪銭である。30、31は紹聖元宝(1094年)である。

五輪塔 中世に作られた塔であろうが、中世末期か近世になってその石をばらばらに石組に使用している。調査区周辺には多くの五輪石を使った墓が見られる。15は火輪、16は水輪、17は地輪であり、空輪・風輪は検出できなかった。



第6図 出土遺物実測図(1)



第7图 出土遺物実測図(2)

3 まとめ

瀬田城跡は西光寺山から北東に張り出す丘陵で鳥田川東岸に位置する。鳥田川は周東町祖生から西流し、今岡付近で支流である四割川を集め、流れを北西に転じて瀬田上の調査区西側を通り、上久宗で再び西流する。この鳥田川は瀬田付近では直流しているが、中世以前は調査区東側に流れを変え蛇行していたものと思われる。従って、調査区の在る丘陵と鳥田川西岸の丘陵はひとつに連なっていたと考えられる。調査区の在る丘陵の東西には標高約60mの台状の平地が広がる。調査区の在る東側台地は中世に丘陵上部を削平した土を北側斜面に客土して平地にしたものと考えられる。丘陵中央部は調査区より約3m低くなっている。また、調査区の在る丘陵の傾斜は急勾配であり、容易に人が登ることはできない。

遺構は、弥生時代の遺構と中世（室町時代）の遺構の二つに大別できる。

弥生時代の遺構では、調査区東端、丘陵先端部にある竪穴住居跡（SB-1）は丘陵斜面にあって床面の一部が崩落をしている。住居は円型住居で、主柱穴は6本、屋内土壙をもつ。遺物は弥生時代中期の土器片を出土した。調査区南西において、2基の箱式木棺墓を検出した。これらの墓は、いずれも地山を長方形に掘り込み、棺を据え付ける溝を巡らしている。遺物は出土できなかった。次に、調査区西側で検出した土壙は、拳大の角ばった山石をほぼ円形に敷き詰めている。中央部の石は焼けており、中から弥生土器を出土した。おそらく、屋外の焼土壙であったと思われる。最後に、客土した中世遺構面から約1.15m下の北側斜面に段状遺構を検出した。この遺構は幅約18mにもおよび、深さは完掘できなかったため不明だが、かなり大規模で深いものと思われる。遺構からは多量の弥生時代の遺物を出土した。おそらく、当時の人々が集まって祭祈等を行っていたことを伺わせる。以上のことから、調査区北東で調査された畑岡遺跡や清水遺跡と同様、この丘陵上にも小集団の人々が生活していたことを裏付けることができる。

次に、中世の遺構についてであるが、記録によるとこの丘陵上に1555年頃、小方元康が砦として山城を築いたとされている。調査の結果、調査区南側に周囲に溝を巡らした2間×3間の掘立柱建物と北側に1間×2間と思われる掘立柱建物を検出したが、明確には建物を組むことはできなかった。この建物の規模からこの山城は有事の際に緊急に使ったと思われ、生活に使ったと見られる遺物は出土しなかった。ただ、今回の調査では発掘しなかったが、調査区西側の丘陵中央部に堀切があることが確認されており、さらにはこの丘陵が人を寄せ付けない傾斜になっているとともに、当地が玖珂盆地全体、鞍掛城の動向が一望できる格好の地であることは無視できない。調査区西側で出土した石組は当初、山城の建物に伴う遺構と思われたが、石組に中世の五輪石が使われていたことから、この石組は中世末期から近世にかけて造られたもので、そのほとんどが後世の開発によって崩落していることから、その用途は不明である。

玖珂町埋蔵文化財調査報告第2集

瀬田城跡

1994年3月

編集 山口県埋蔵文化財センター

発行 玖珂町教育委員会

印刷 泉菊印刷株式会社